
電波ジャック

紅月夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電波ジャック

【Nコード】

N8657N

【作者名】

紅月夜

【あらすじ】

一日に何回も何回も俺の携帯が鳴る。その電話の相手は毎回違っていて？

最近俺の携帯がおかしい。どうおかしいかというと

ブ　　ブ

「はい、もしも『あ、隊長？今日のおやつ、何がいいですか？』
何でもいいからとつと帰ってこい。仕事をばってんじゃねえよ」

……こんな風いだ。

「絶対これまずいつてか駄目だよなあ」

ところ構わず携帯が鳴るもんだから、完全にマナーモードにして
いる。

「つつーかコレ、俺の声は向こうに届いてないんだよなあ」

何が原因かわからないが、このままではまずいだろうことはわか
る。尸魂界に機密とかあるのか知らないが……。

「うしっ、浦原さんに頼んで穿界門開けてもらうか」

思い立ったらすぐ行動！俺はベッドにくくりつけてある代行証に
手を伸ばし、死神化して窓から飛び出した。

「で、冬獅郎！俺の携帯どうしたらいい!?」

「日番谷隊長だ！ってか何で俺のところに来る!?!」

浦原さんは快く穿界門を開けてくれた。途中、拘突に追いかけられたりしたが、無事尸魂界に着き、俺は早速さっきの電話の主のもとを訪れた。

「え、だってその電話、十番隊のが一番多いんだぜ?」

事実、一日にかかってくる電話の八割方は十番隊の電話だ。大抵片方は乱菊さんだが。

「松本おお!!!」

「やあですね、隊長。隊員との業務連絡はつかですよ?」

「え?宴会って業務連絡に入るのか?」

「やっぱりサボってんじゃねえか松本おお!!!」

一応言っておこう。覚えとけよと言わんばかりの眼差しで俺を睨みながら瞬歩で消えた乱菊さんは滅茶苦茶怖かった……。

「とりあえず黒崎。その電話のことは俺なんかより、十二番隊に相談した方がいいと思うぜ?」

「……十二番隊は勘弁してくれ」

少し前にルキアから聞いた噂話によると、死神代行は珍しいから研究したいと言っていた奴がいたとかいないとか……ともかく、近寄りたくない。

「あーなんとなく理由はわかるが……阿近あたりなら大丈夫だと思
うぞ?」

「ア……コン……?えつと……?」

誰だっけ?と首を捻っていると、目の前で冬獅郎がため息をつい
た。幸せ逃げるぞ冬獅郎。

「仕方ねえ。ついてってやるよ」

冬獅郎って結構優しいよな。

「……ということなんだが、どうにかならないか、阿近?」

「まあ。大体、俺らの声は霊力のある奴にしか聞こえないもんな
ん、ほつといたって害は無いんですけどねえ」

アコンさんなる方が誰かと思えば、小さい角の生えた目付きの悪
い人だった。

「しかし、電話の内容を黒崎に聞かれているというのはあまり気分
のいいものではないんだが?」

「俺だつて聞きたくて聞いているわけじゃねえよ」

冬獅郎、優しいけどたまにひでえよな。

「一番簡単なのは電話が鳴ってもとらないうつことなんです、根
本的な解決にはなりませんしねえ」

俺もそれは考えたけどよ、俺の携帯は生憎と尸魂界以外にも繋がってるからな。むしろ、尸魂界に繋がる方がイレギュラーなんだよ。

「じゃあねえ。携帯電話の大きさを常時展開できる霊圧遮断型の小型結界発生装置でも作りますよ」

「頼む」

「お、おお……?」

「じゃ、その辺で待っていてください。すぐ作りますんで」

阿近さんの告げた内容が俺にはさっぱり理解できない。

「冬獅郎……全然全く意味がわからなかったんだけど……?」
「何がだ?」

……誰かが言ってた。冬獅郎は天才児だと。

「阿近さん?が言ってたこと」

「簡単なことだ。黒崎の電話が尸魂界のと繋がる原因はお前の霊圧にあるから、それを完全に遮断してしまえばもう繋がらないっていう原理だ」

「はあ」

阿近さんいつそんなこと言ってたっけ?

「阿近の言った内容から普通に考えられることだと思うが?」

その阿近さんの言った内容がわからなかったんだって。

「まあ、説明がなかったってことは、原理を知らなくても使えるものだったことなんだろう」

俺は今思った。ぜってー冬獅郎は探偵になれる。

「はい、できましたよー」

「へ？」

「随分早かったな」

「ぶっちゃけ、その辺にあつた小型結界発生装置を見た目ちよつと改造して、結界の動力源を黒崎一護用に調整しただけですからね」

阿近さんにひょいっと気軽に渡されたものは、どこからどう見てもただのストラップにしか見えないものだった。

「使い方ってか、携帯電話にぶら下げとくだけです。黒崎の微量の霊力を使って勝手に結界を発生させるようになってます」

「ええっと、有り難うございます……？」

「胡散臭いと思ってるだろうが、効果は保証してやるよ」

俺は持つてきていた携帯にストラップを結びつけ、まじまじと眺めてみた。

「……何の変化もないんだけど？」

「安心しろ。お前が気がついてないだけで、そいつはちゃんと働いてる」

同じように眺めていた冬獅郎は俺を呆れたような目で見たあと、阿近さんに向きなあった。

「急に妙なことを頼んですまなかつたな。礼を言う」「いいですよ。俺もいい息抜きになりましたし」

息抜き……？今のが息抜き？わけわかんねえ。

「よくわかんねえけど、ありがとな！」

「……どういたしまして」

今の間はなんだったんだらう？

「……帰るぞ、黒崎」

「おう！冬獅郎も、ありがとな！！」

「……どういたしまして」

それから、俺の携帯電話は二度と尸魂界からかかってこなくなつた。そのかわり……

「一護！貴様の電話に繋がらなくなつたではないか！！」

ルキアや、現世にいる死神と電話が繋がらなくなつた。

「よーしっ、また十番隊いつてくるか！」

(後書き)

結構慌てながら書いたので、話が無茶苦茶ですね。すみません、紅月夜です(?)

今も若干慌ててます。やらなきゃいけないことほっぽりだして後書き書いてるんだ……！

あーやばいやばいや切近いのにうわぁん！ちよっもう退散します。
意味不明でごめんなさいiiiiiii m (——) m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8657n/>

電波ジャック

2010年10月20日19時38分発行